

日中両言語における物語構築の特徴 —注視点と構文選択の観点から—

勝川 裕子

DOI: 10.18999/stul.37.39

1. はじめに

「視点」には話し手がどこから見ているかという〈視座〉と、どこを見ているかという〈注視点〉の2つの要素があり、〈視座〉を判断する構文的手がかりとしては、ヴォイスや授受表現、移動表現などが挙げられる。日本語教育では、従来、このような視点にかかわる研究が盛んに行われており、日本語母語話者は一人の人物に視点を固定する傾向が見られるのに対し、中国語を母語とする日本語学習者は複数の人物の視点から描写する傾向が見られることが指摘されてきた(田代 1995、武村 2010、魏志珍 2010 他)。しかしながら、日本語学習者による産出文が移動視点型であることが、彼らの母語、即ち中国語に起因するものであるか否かについては触れられていない。

このような状況に鑑み、本稿では漫画描写という調査手法を採用し、中国語で物語を紡ぐ際に視点、中でも〈注視点〉がどこに置かれ、それによりどのような構文が選択されるかについて、日本語と対照しながら考察していく。

2. 視点研究の概観

2.1 視点論

本節ではまず、本稿における調査、考察の概念的基盤となる「視点」がこれまでどのように捉えられてきたかについて、視点論及び言語習得研究の観点から概観していく。

「視点」という概念を一つのまとまりとして捉えた研究に、大江 1975、久野 1978 が挙げられる。大江 1975 は、描写する出来事をその当事者として内部から主観的に眺める話し手の

位置を「視点の軸」と呼び、この軸は現実から離れて話し手が身をおいて眺める場所をも含んだ概念であると説明している。久野 1978 は、話し手が出来事を描写する「カメラ・アングル」を「視点」と定義し、このカメラ・アングルをある人物に近づける度合いを「共感度」と呼んでいる。

一方、「視点」を一つのまとまりとしてではなく、物事を見る立場と見る対象とに分けて捉えた研究に、佐伯 1978、宮崎・上野 1985、松木 1992 等が挙げられる。佐伯 1978 は「視点」を対象を見る目の位置である〈視座〉と、視座から眺めたときに注目される対象である〈注視点〉とに分けて捉えるべきであると指摘している。例えば、次の例(1)では、話し手は「カメラ・アングル」(久野 1978)を「妹」に近づけ、妹の〈視座〉から彼女に何が起こったかを描いている。また、妹に発生した出来事に注目していることから、〈注視点〉は「妹」であり、例(1)の〈視座〉と〈注視点〉は一致している。一方、例(2)では、補助動詞「～テクレル」を用いて「ケンが妹に英語を教える」ことを受益と捉えていることから分かるように、話し手は「妹」の〈視座〉から「ケン」の動作行為に注目しており、この時〈注視点〉は「ケン」となる。

(1)妹がケンに助けられた。

(2)ケンが妹に英語を教えてくれた。

(例(1)(2)は矢吹ソウ 2017 より引用)

つまり、〈視座〉とは「どこから見るのか」を反映する概念であり、〈注視点〉とは「どこで見るのか」を反映する「視点」の下位概念であると定義できるが、このような捉え方は、例(1)(2)のように〈視座〉と〈注視点〉が複雑な対応関係をなす日本語において有益である。

また、「視点」を事態把握の観点から捉えた場合、日本語は出来事を話し手の立場から捉える「立場指向」の文を用いる傾向があると水谷 1985 は指摘している。池上 2006 も同様に、日本語話者は話し手に視点を置く「主観的把握」を好むと述べており、主観性が現れる指標として、心理的述語や指示詞、移動動詞等を挙げている。

2.2 日本語学習者の視点に関する研究

このような視点論を背景に、日本語学習者の視点習得に関わる研究も進められてきた(田代 1995、渡邊 1996、武村 2010、矢吹ソウ 2017 等)。渡邊 1996 は漫画のストーリーを説明した談話を用いて、視点と構文選択の関連性を調査しており、日本語母語話者は視点表現を

多く使用するのに対し、日本語学習者の発話には、ヴォイスや授受表現など〈視座〉を判定するための構文的手掛かりがほとんど見られないことを指摘している。また、〈注視点〉の移動という観点から見た場合、漫画展開の始めから終わりまで一人の人物の行為に注目する〈固定注視点〉型と、複数の登場人物の行為を描写する〈移動注視点〉型の 2 タイプが存在するが、日本語母語話者の談話は前者のタイプが多く、日本語学習者の談話は後者のタイプが多いことが示されている(渡邊 1996)。一方で、筆記による漫画描写においては、日本語母語話者、日本語学習者共に〈注視点〉が移動するとも報告されており(田代 1995)、〈注視点〉の移動に関しては見解の一致を見ていない。

また、上に挙げた一連の研究は、中国語や韓国語の母語話者を対象に学習者と日本語母語話者のデータを比較したものであるが、日本語学習者の中間言語(interlanguage)に見られるこのような特徴が、彼らの母語、即ち中国語や韓国語に起因するものであるか否かについては触れられていない。

2.3 中国語の視点に関する研究

このように、視点研究は日本語学や日本語教育において一定の成果を上げてきた一方で、中国語学ではこれまであまり取り上げられてこなかった。¹⁾これは中国語が日本語のように〈視座〉を反映する構文的手掛かりを豊富に持たない言語であることに起因すると考えられる。先に見たように、中国人日本語学習者の発話に、授受表現や受身表現といった〈視座〉を判定するための表現がほとんど見られないこととも、母語による負の転移を反映したものであろうと推測される。

こうした特徴をもつ中国語においては、〈注視点〉を分析に加えることが有効である。授受や受身表現などの構文的手掛かりから判定される〈視座〉とは異なり、〈注視点〉は話し手が見ている対象であり、能動文であれば、主節・主文の動作主、受動文であれば被動作主といったように、文の主格に位置する人物から判定され得る(渡邊 1996)。前述のように、視点

¹⁾ 「事態を眺める側のいる場所」という概念を大江 1975 は「ホームベース」と呼んでいるが、刘月华等 2019 では、これに近い概念として“立足点”を導入している。刘月华等 2019 は“立足点”を「話し手の位置、または“我”の位置」とし、第三人称を用いて客観的に叙述するときは、「叙述されている人物のいる位置」と定義しており、方向補語“V 来/V 去”の選択に関与すると述べている。

このように、中国語学では、視点の概念を取り入れて、個別の言語事象に見られる主観性を考察したものはあるものの、視点そのものをめぐる体系的な研究や談話レベルにおいて視点を包括的に扱った研究は未だ見られない。

表現の非用(avoidance)²⁾により〈視座〉の判定が困難であった日本語学習者の発話においても、〈注視点〉を分析に加えることで、日本語母語話者との相違が明確になるように、中国語においても日本語とは異なる〈注視点〉の特徴を見出すことが可能となるであろう。

日中対照研究において視点を扱った研究としては、下地 1997・2011 や古賀 2018、張芑蕾 2019 等が挙げられるが、いずれの研究においても、日本語の視点には〈視座〉が深く関わっているのに対し、中国語の視点には〈注視点〉が関わっていることが指摘されている。³⁾ また、次の例(3)のような所謂「流水文」を扱った研究に、沈家煊 2012 や橋本 2020 が挙げられるが、一文中において主語が頻繁に交代する流水文の特徴は、〈移動注視点〉型の談話の特徴と似通っており、非常に興味深い。

- (3) (万丽)回到宿舍，聂小妹正在通电话，看到万里进来，就匆匆挂了电话，回到桌边看起来，她虽然不问万丽什么，但从她身上散发出来的气息，万丽明白她是很想问问万丽到哪里去的，这一点，聂小妹和余建芳不同，如果是余建芳，就会直接地问，还会牛屎里追出马粪来，聂小妹却不作声，只是散发出一种追问的气息让你感受到，压迫着你，让你不得不说。(范小青《女同志》)

以上のような着想と先行研究の問題点を踏まえ、本稿では、中国語における視点の在り方とその特徴を明らかにするために、中国語母語話者に 4 コマ漫画を提示し、一連の物語となるよう中国語で筆記してもらおうという調査を行った。また、日本語母語話者に対しても同様の調査を行い、比較の対象とした。本稿では、視点の在り方を反映する構文的手掛かりとして、授受構文と受身構文を取り上げ、視点の中でも特に〈注視点〉の移動と構文選択との関連性について検討していく。

3. 調査概要

²⁾ 中間言語研究における「非用」(avoidance)とは、ある場面で母語話者なら当然使うだろうと思われる表現を、学習者が一定の学習段階に至っても使えない、あるいは使わないという現象を指す用語であり、「誤用」(error)として表面に現れるものよりも深い問題があるとされている。詳細は、水谷 1985 を参照。

³⁾ 下地 2011 の指摘によれば、日本語のアスペクト形式の選択(～タ/～テイル)には、出来事のどこから見ているかという〈視座〉が関わっているのに対し、中国語のアスペクト形式の選択(V 了/V 着)は、出来事のどこを見ているかという〈注視点〉が関わっており、同じ viewpoint aspect とはいえ、その内実はかなり異なるものであることが窺える。

3.1 被験者とデータ収集

本調査では中国在住の中国語母語話者と日本在住の日本語母語話者に調査を依頼し、それぞれ中国語母語話者 95 名、日本語母語話者 92 名から回答を得た。被験者の選定においては、学習言語の影響が母語に反映されうることを考慮し、日本語・中国語学習歴のない現地在住の母語話者を選定した。

調査に用いた資料は、4 コマから成る漫画である(本稿末尾の[資料]を参照)。登場人物は、男性、おばあさん、女性、少年の計 4 名で、1 コマ目を除く 3 コマ全てに少年が登場する。この漫画を採用したのは次の理由による。まず、吹き出しによる会話が記されていない漫画を選定することで、被験者の視点を操作しうる要素を排除した。また、2 コマ目を除いて 1 コマ内に登場人物が 2 人、ほぼ同じ大きさで描かれていることから、〈注視点〉がどちらの登場人物に置かれるかを明確に分析することが可能であると考えた。加えて、漫画の内容から、本稿が分析対象とする授受表現、受身表現が出現するであろうと予想されたことも、この漫画を採用した理由の一つである。

被験者には、1 コマ目から 4 コマ目までの漫画を見て、一連の完成した物語となるよう、中国語 150 字／日本語 250 字程度で記述するよう指示を与えた。また、記述においては、登場人物の設定は自由であること、会話文を含んでも良いが、ストーリー展開が分かるような文章で記述するよう説明した。以下に中国語と日本語の回答例を示す(C は中国語、J は日本語、数字はサンプル番号、囲みは〈注視点〉を示す)。

(3) [C09]

有一天，老爷爷给了老奶奶一盒巧克力。这被家里的小孙子给发现了。于是这个小男孩便翻找出妈妈的针线盒，开始对自己的衣服进行加工改造。妈妈察觉到小男孩在干什么坏事，便抓住小男孩想要质问他。接下来妈妈就发现小男孩在自己的衣服上缝了许多的口袋，口袋里装着爷爷奶奶的巧克力。

(4) [J04]

ある日、おばあさんは来客者の男性からチョコをもらいました。一方で、坊主頭の少年は裁縫用具を使って、ジャケットに何やら細工をしているようです。しばらくしてその少年が踏み石を降りて庭に出ようとしていると、家の中から女性が現れ、少年を捕まえました。女性が少年にジャケットの内側を見せるように指示すると、大量のチョコ

ができました。なんと少年はジャケットの裏側にポケットをたくさん縫い付けて、チョコを盗もうとしていたのです。少年は悪事がばれて恥ずかしそうです。

3.2 調査対象項目と分析方法

日本語の視点研究では、従来、〈視座〉判定の構文的手掛かりとして授受表現や受身表現、移動表現などが取り上げられてきた。中浜・栗原 2006 は、物語文において話し手がある人物に入り込み内面を描写することができることに注目し、主観表現(「思う」「考える」等)や感情表現(「嬉しい」「怒る」等)も〈視座〉を示す手掛かりになると提案している。⁴⁾

本稿では、これら構文的手掛かりのうち、主に授受表現とヴォイス表現を取り上げ、被験者が記述した物語データから〈注視点〉を抽出し、構文選択との関連性について考察を行った。〈注視点〉の判定については、渡邊 1996 を参考に、話し手が見ている対象、即ち能動文であれば、主節・主文の動作主、受動文であれば被動作主といったように、文の主格に位置する人物を〈注視点〉とした。

次の表 1 は、本調査において観察された授受表現およびヴォイス表現の各種タイプとその典型例を示したものである。従来の研究では、〈視座〉の判定をするための構文的手掛かりとして、授受表現では「てあげる／(て)くれる／(て)もらう」⁵⁾が、ヴォイス表現では受身を表す「れる／られる」が取り上げられてきたが、本稿では〈注視点〉となる対象とそれに伴う構文選択の特徴を観察するため、授受の方向性を表す動詞(「贈る／あげる」・「受け取る」・“送／給”・“獲得／收到”等)や、能動文も調査の対象とした。日本語の能動文には、「女性が少年を捕まえた」のような他動詞文だけでなく、「少年は女性に捕まった」のような自動詞文も含む。表 1 から分かるように、〈注視点〉が異なることで、異なるヴォイスが選択されるのは言うまでもなく、事物のやりもらいを表す授受表現においても、異なる動詞が選択される。

⁴⁾ 中浜・栗原 2006 は、アスペクト(「思っている」等)やモダリティ(「だろう」等)を伴わない「思う」や「嬉しい」等の表現を、その人物の〈視座〉から主観的に思考や感情を表すものとみなしている。一方で、視点制約の厳しい日本語と比べ、中国語では直接第三者の思考や感情に言及することができることから、日本語と同等に〈視座〉を反映する構文的手掛かりであるとみなすのは妥当ではない。したがって、本稿では思考や感情を表す表現を考察の対象外とした。

⁵⁾ 「くれる」「もらう」とは異なり、「あげる」のような動作主主語で〈視座〉が動作主にある動詞は、行為主体に対する視点の接近がなくとも用いられる(久野 1978)ことから、「中立の視点」を含むと考えられ、構文的手掛かりからは除外している先行研究が多い。

次節では、一連の物語が展開する中で、〈注視点〉がどのように移動し、それに伴いどのような構文が選択されるかについて、日本語と中国語でそれぞれ見ていく。

表 1 日中両言語における〈注視点〉と構文的手掛かり

	中国語 構文的手掛かり	日本語 構文的手掛かり
授受	送／給 等 [C06] 老爷爷送给老奶奶巧克力。	贈る／あげる 等 [J06] 来客が女性に箱に入ったチョコレートを贈った。
		(て)くれる [J71] お客さんがお土産としてチョコレートをくれました。
	获得／收到 等 [C80] 小明的妈妈收到了邻居送来的巧克力。	受け取る 等 [J55] おばあさんは近所に越してきた男性からチョコレートを受け取った。
		(て)もらう／(て)いただく [J85] おばあさんは知り合いからお菓子をいただきました。
ヴォイス	能動文 [C01] 妈妈抓住了刚准备出门的小明。	能動文 [J71] 女の人が外に出掛けようとする男の子を、怒った様子で捕まえた。 [J16] 男の子はお姉さんに捕まりました。
	受動文(被字句) [C13] 儿子出门的时候被妈妈抓住了。	受動文(れる／られる) [J30] 少年が遊びに出掛けようとしたらサザエさんに止められた。

4. 調査結果

4.1 〈注視点〉と授受表現

まず、物語冒頭の場面における〈注視点〉の置かれ方を見ていく。

1 コマ目では、画面中央に男性が、左手奥におばあさんが配置されており、2 人の間にチョコレートの包みが置かれている。中国語母語話者がこの場面を記述したデータからは、以下の例(5)～(9)に挙げる通り、5 つの〈注視点〉パターンが見られた。例(5)(6)は登場人物 2 人のうちのいずれかに〈注視点〉を置くタイプであり、例(5)はチョコレートを贈る側の男性が、例(6)は受け取る側のおばあさんが〈注視点〉となっている。一方、例(7)は男性とおばあさんがセットで一つの〈注視点〉となっており、両者の間の授受を描くものではない。例(8)(9)は 1 コマの中で〈注視点〉が移動するタイプである。例(8)では、まず男性に〈注視点〉が置かれ、次におばあさんに〈注視点〉が移動しているが、これは男性がチョコレートを手渡し、おばあさんがそれを受け取り喜ぶといった動作の継起順を反映していると考えられる。例(9)は例(8)とは逆のパターンであり、授受の方向性がほかの 4 パターンとは異なるタイプである。⁶⁾

【1 コマ目：中国語の〈注視点〉】

(5) 単独注視(男性)

[C06] 老爷爷送给老奶奶巧克力。

(6) 単独注視(おばあさん)

[C80] 小明的妈妈收到了邻居送来的巧克力。

(7) 単独注視(男性&おばあさん)

[C26] 爸爸和妈妈在拆一个快递，里面是巧克力。

(8) 注視点移動(男性→おばあさん)

[C51] 丈夫给妻子送了一盒巧克力，妻子感到很开心。

(9) 注視点移動(おばあさん→男性)

⁶⁾ 中国語母語話者の回答からは、例(9)のように、「おばあさんが贈り手であり、男性が受け取り手である」と解釈するケースが 5 例見られた。これは後述するように、日本語母語話者の記述データには見られないパターンである。1 コマ目では、男性は座布団の上に座っており、おばあさんは座蒲団を敷かずに床に手をついていることから、男性が手土産を持っておばあさん宅を訪れたことが読み取れるが、このような解釈は多分に文化背景を反映していることから、異文化間で共通認識を得ることは難しいと考えられる。こういった要素は調査の設計段階でできる限り排除する必要がある。

[C40] 張阿姨来小明家做客时, 送了一盒巧克力给小明家。小明爷爷收下后, 十分感激地向张阿姨道谢。

一方、日本語母語話者の記述データからは、以下の例(10)～(12)に挙げる通り、3つの〈注視点〉パターンが見られた。中国語母語話者データに見られた例(7)のような「単独注視(男性&おばあさん)」のパターンは出現せず、また、例(9)のような授受の方向性が逆のパターンも見られなかった。つまり、日本語母語話者のデータからは、1コマ目ではモノのやりもらい、即ち授受が行われていると認識されており、授受の方向性についても統一されていることが分かる。

【1コマ目:日本語の〈注視点〉】

(10) 単独注視(男性)

[J06] 来客が女性に箱に入ったチョコレートを贈った。

(11) 単独注視(おばあさん)

[J27] おばあさんは客人からチョコレートがたくさん入った箱をいただいた。

(12) 注視点移動(男性→おばあさん)

[J46] 男性のお客さんがおばあさんにチョコを差し出し、おばあさんは丁寧に受け取りました。

このような〈注視点〉のパターンを出現数とともにグラフに表したものが、次の図1a(中国語)、図1b(日本語)である。

まず、日本語ではおばあさんを〈注視点〉とするケースが57%を占めているのに対し、中国語ではわずか7%と1割にも満たないことが分かる。一方で、中国語では男性を〈注視点〉とするケースが33%を占めており、次いで男性からおばあさんへ〈注視点〉が移動するケースが27%を占めていた。〈注視点〉が移動するケースに関しては、日本語では20%程度であったのに対し、中国語では32%を超えていることから、登場人物一人一人の動作を描こうとする傾向が日本語より強いことが窺える。渡邊 2000 では、中国人日本語学習者は物語を構築する際、登場人物のそれぞれに〈注視点〉を移動させ、「Aはどうした。Bはどうした。」と記述する傾向にあることが指摘されているが、このような〈注視点〉移動の傾向性は、学習者の母語である中国語からも窺えることが分かる。また、中国語では男性とおばあさん

をセットで〈注視点〉とするケースが 26%と全体の 4 分の 1 強を占めているのに対し、日本語ではこのようなケースは皆無であった。

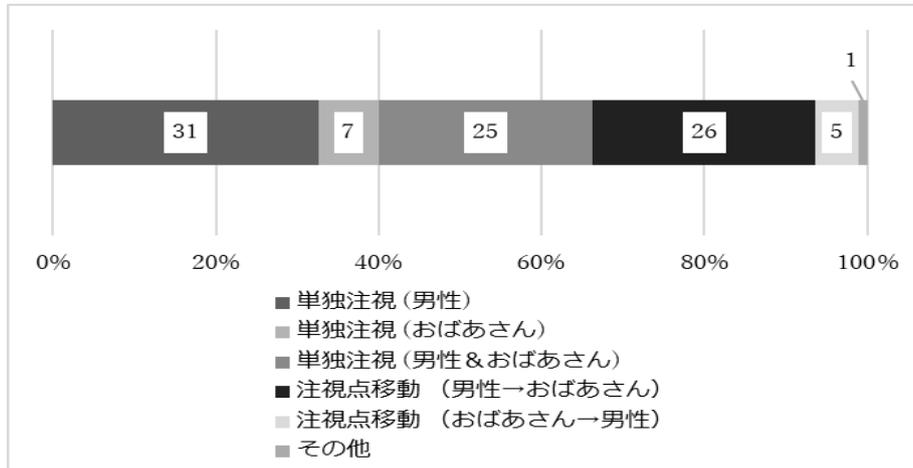


図 1a: 中国語の〈注視点〉(1 コマ目)

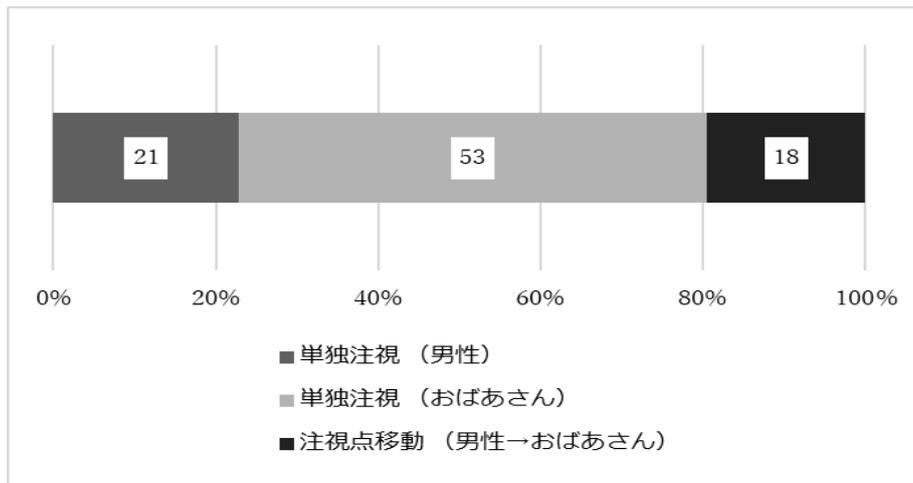


図 1b: 日本語の〈注視点〉(1 コマ目)

日中両言語におけるこのような〈注視点〉の特徴は、構文選択にダイレクトに反映されている。次の図 2a(中国語)、図 2b(日本語)は 1 コマ目における授受表現の選択の有無と授受表現の種別をそれぞれグラフに示したものである。

日本語では、例(13)(14)に挙げるように、男性を〈注視点〉とする「(て)くれる」とおばあさんを〈注視点〉とする「(て)もらう/(て)いただく」があるが、両者はいずれもおばあさんを〈視座〉としており、この 2 つのケースが全体の 76%を占めている。一方、中国語では、男性

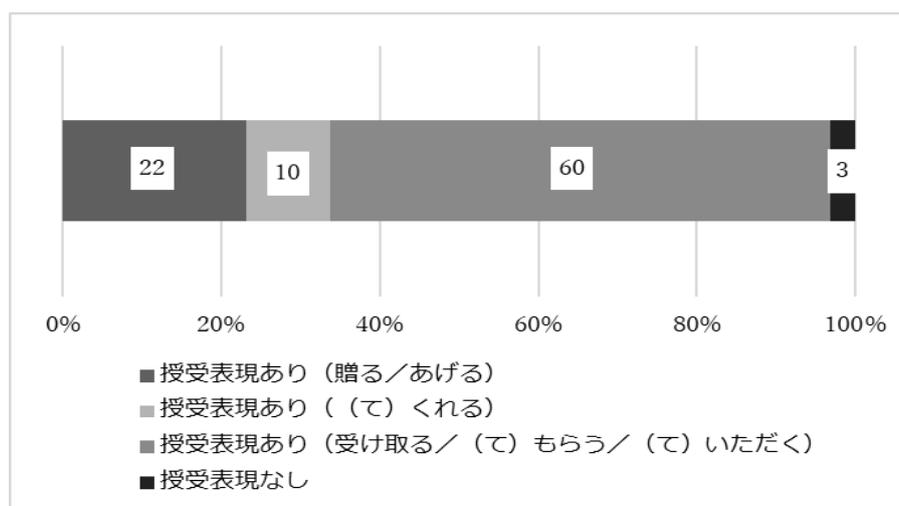


図 2b: 日本語の授受表現(1コマ目)

4.2 〈注視点〉とヴォイス表現

次に、〈注視点〉の移動とヴォイスの選択について見ていく。

まず、2コマ目では、登場人物は少年 1 人であるため、例(18)(19)のように、〈注視点〉は日本語、中国語ともに全て少年に置かれていた。

(18)[C06] 小男孩突发奇想，打算改装自己的衣服。

(19)[J04] 坊主頭の少年は裁縫用具を使って、ジャケットに何やら細工をしているようです。

次いで、3コマ目で新たな登場人物として女性が導入されるが、この時、〈注視点〉が少年から女性へ移動するか否かを観察した。この場面を記述したデータからは、中国語母語話者、日本語母語話者ともに、同じ〈注視点〉パターンが得られた。以下、中国語の例(20)～(23)及び日本語の例(24)～(27)を対照しながら見ていく。

例(20)(24)は新しく導入された女性に〈注視点〉を置いており、2コマ目から〈注視点〉の移動があったことが窺えるのに対し、例(21)(25)は2コマ目の〈注視点〉をそのまま引き継ぎ、少年がどうなったかを描いている。一方、例(22)(23)、例(26)(27)はコマ内で〈注視点〉の移動が見られるパターンである。前節でも考察した通り、コマ間だけでなく、コマ内でも〈注視点〉の移動は見られ、登場人物それぞれの動作行為や感情、思考を描写する。3コマ目のシーンを動作の継起順に捉えた場合、「少年が出掛けようとする」→「女性が怒って少年

の襟首を掴む」→「少年が気まずそうにする」といった順に場面を細分できるが、この流れの中のどの部分を切り取って描くかによって、〈注視点〉の置かれ方が異なってくるのが分かる。

【3 コマ目：中国語の〈注視点〉】

(20) 単独注視(女性)

[C01] 妈妈抓住了刚准备出门的小明。

(21) 単独注視(少年)

[C13] 儿子出门的时候被妈妈抓住了。

(22) 注視点移動(女性→少年)

[C21] 女人怒气冲冲地追着男孩冲出房屋，男孩神色慌张，躲闪不急，被女人从后面一把捉住了衣领。

(23) 注視点移動(少年→女性)

[C26] 儿子在出门的时候被妈妈发现了，妈妈把儿子拎了回来。

【3 コマ目：日本語の〈注視点〉】

(24) 単独注視(女性)

[J20] 女の人が外に出ていこうとしている男の子を怒っている様子で捕まえた。

(25) 単独注視(少年)

[J13] 少年が裁縫を終えた服を着て出かけようとしたところ、母親に止められた。

(26) 注視点移動(女性→少年)

[J47] 怒った顔をした女性が男の子の服を後ろから引っ張り、男の子を引き留めた。男の子はぎょつとした顔をしている。

(27) 注視点移動(少年→女性)

[J78] カツオくんがでかけようとする、後ろからサザエさんがすごい勢いで近づいてきて、家から出ようとするカツオくんを捕まえました。

このように、〈注視点〉のパターンだけを見た場合、日本語と中国語では同じ特徴を有していることが分かる。しかし、それぞれのパターンの出現率は異なる。以下の図 3a(中国語)、図 3b(日本語)は、〈注視点〉のパターンを出現数とともにグラフに示したものである。

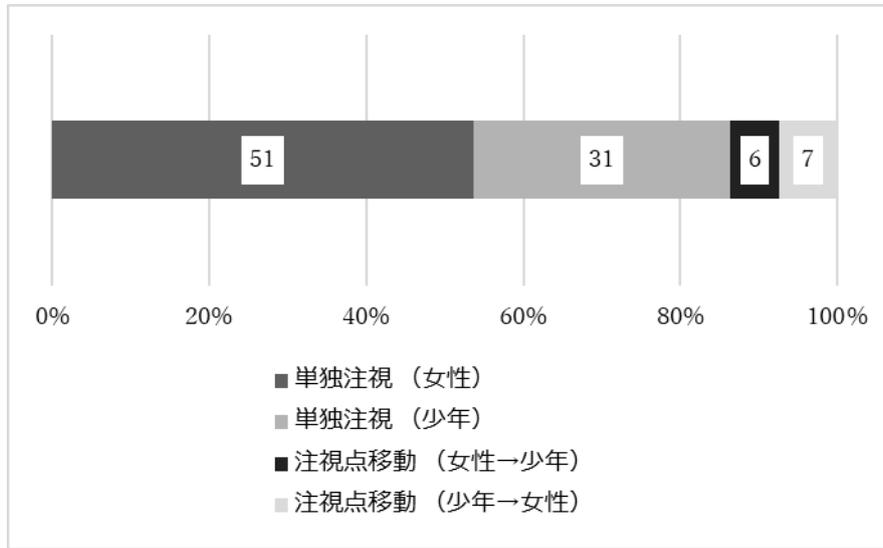


図 3a: 中国語の〈注視点〉(3 コマ目)

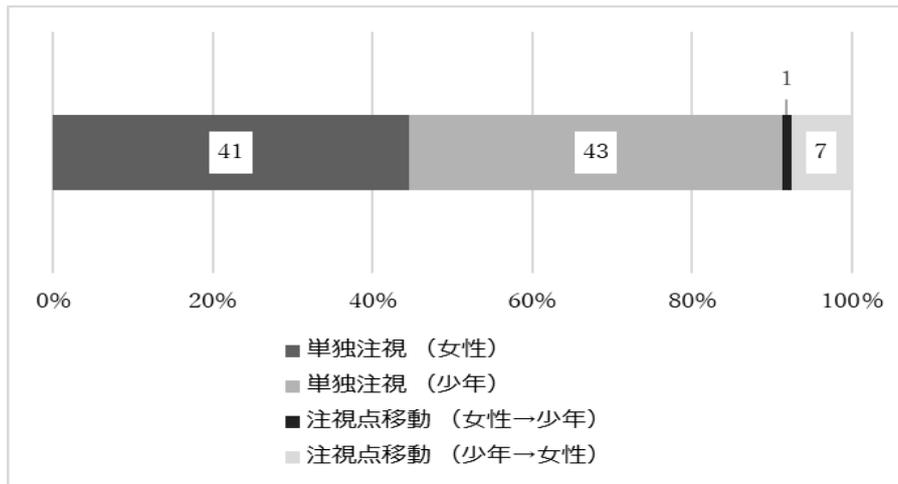


図 3b: 日本語の〈注視点〉(3 コマ目)

まず、〈注視点〉の移動に関しては、中国語では 2 コマ目から 3 コマ目に渡り〈注視点〉が移動したケースは全体の 53%を占めており、コマ内における〈注視点〉移動のケースも含めると、7 割弱のデータにおいて〈注視点〉が少年から女性へと移動したことが分かる。一方、日本語において〈注視点〉が移動したケースは 53%(コマ内の〈注視点〉移動を含む)を占めており、中国語における〈注視点〉の移動には及ばないものの、過半数のケースにおいて新しく場面に導入された女性に〈注視点〉を移動させていることが分かる。これまでの研究では、日本語では「大きな段切れがない限り、視点の一貫性がテキストの構成要素として要求

される」(池上 1983:36)ことが指摘されており、日本語は〈固定注視点〉型言語であるとされてきた(渡邊 1996)。しかしながら今回の調査では、日本語においても、〈注視点〉の移動がないパターン(43 例;47%)とほぼ同等に〈注視点〉の移動がみられたことから、日本語における視点の一貫性、〈注視点〉の固定性に関しては、再検討の余地があると考ええる。

日中両言語におけるこのような〈注視点〉の特徴は、ヴォイスの選択において言語化され、明確になる。以下の図 4a(中国語)、図 4b(日本語)は、3 コマ目の場面描写に見られるヴォイスの種別と出現率をそれぞれグラフに示したものである。

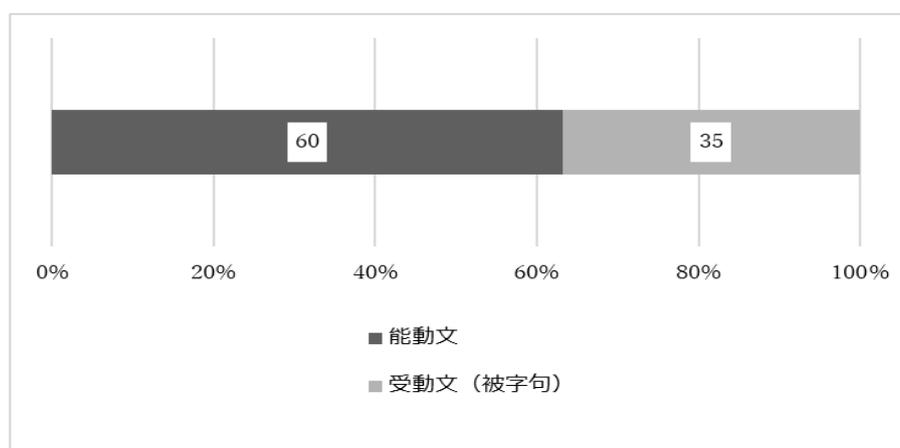


図 4a: 中国語のヴォイス表現(3 コマ目)

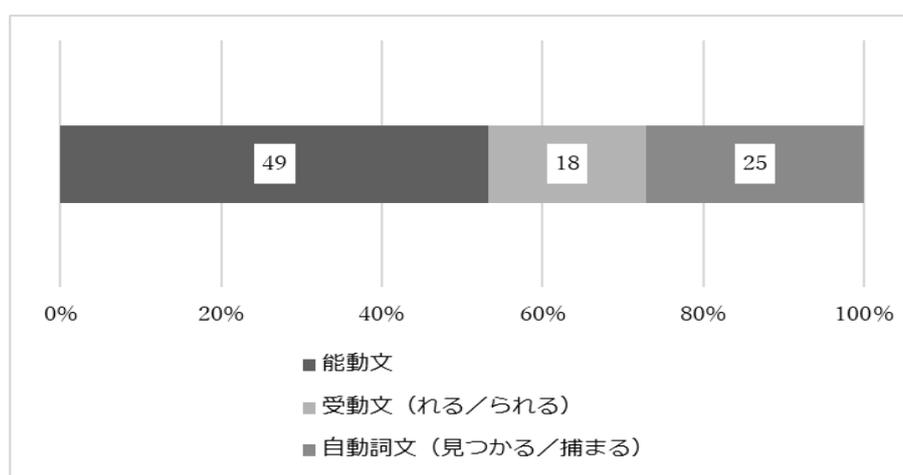


図 4b: 日本語のヴォイス表現(3 コマ目)

中国語では〈注視点〉と選択される構文が 1 対 1 で対応している。つまり、3 コマ目で女性を〈注視点〉とする場合、例(20)のような能動文が選ばれるのに対し、2 コマ目から〈注視点〉

を引き継ぎ、少年の様子を描く場合、例(21)のように“被”構文で表現されることになる。これまでの研究では、中国語は日本語に比べ受動文を用いることが相対的に少ないことが指摘されてきたが、⁷⁾今回の調査における受動文の使用分布については、日本語よりも中国語の方が受動文の使用率が高いという結果が得られた(日本語の受動文 20%; 中国語の受動文 37%)。

これに対し、日本語では少年を〈注視点〉とした場合、「止められた」、「襟首を掴まれた」のような受動文が選択されるケースと、「見つかった」、「捕まった」のような自動詞文が選択されるケースの 2 通りが観察された。一方で、能動文が選択されるケースも過半数を占めており、〈注視点〉の移動と対応していることが読み取れる。

5. おわりに

本稿の目的にそって得られた結果を以下にまとめる。

中国語の物語構築は、先行研究において指摘されてきた中国人日本語学習者の物語構築の特徴とおおむね一致している。即ち、日本語と比べ、中国語では〈注視点〉の移動が相対的に多く、コマとコマの間だけでなく、同一コマ内であっても登場人物一人一人に対し描写を行うケースが日本語より多く見られる。したがって、中国人日本語学習者の中間言語に見られる視点表現の特徴(田代 1995、武村 2010、魏志珍 2010 ほか参照)は、彼らの母語である中国語の特徴を反映したものである可能性が示された。

物語中の登場人物のうち、誰の動作行為を注視するかによって、選択される構文は異なる。本調査では、日中両言語間において授受の描き方に大きな差が見られた一方で、受動文の出現率に関しては、これまで先行研究で指摘されてきたような大きな隔たりは確認できなかった。

今回の調査では残された課題も多くある。今回採用した 4 コマ漫画は日本人被験者にとって馴染みのあるものであり、登場人物の人間関係のある程度知っていたため、一種の親近感や知悉度の高さが〈注視点〉の決定に影響を与えていた可能性も否めない。いずれの

⁷⁾ 劉爾瑟 2017 の指摘によれば、『中日対訳コーパス』(北京日本学研究中心、2003) に収録されている小説の中から、「レル・ラレル」をキーワードにして収集した日本語の受身文は 2491 例あり、そのうちの約 40% が中国語では能動文に訳されているという。このことから、劉爾瑟 2017 は中国語では日本語ほど受身文の使用率が高くないと述べている。

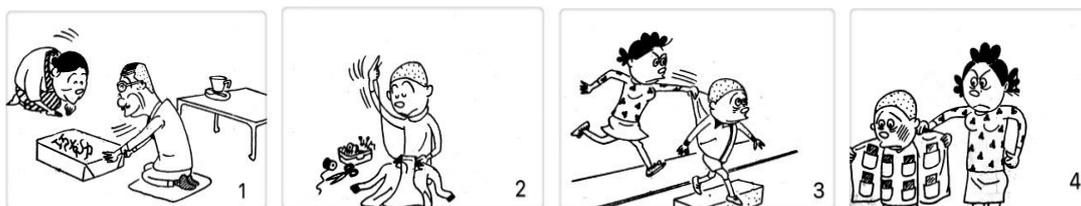
被験者にとっても等しく馴染みのない、且つ文化的要素を排除した漫画素材を選定する必要があるであろう。また、今回の調査では、言語そのものが持つ構造的特性については言及することができなかつた。例えば、次の例(28)(29)のように、中国語では複文構造が多く使用されていたのに対し、日本語では埋め込み文で表現されているケースが散見された。こうした言語の構造的特性が視点に与える影響についても今後考察する必要がある。

(28) [C87] 儿子要出门, 妈妈生气地冲过来拽住他的衣领。

(29) [J66] 出来上がった上着を着て外出しようとしていたカツオを、姉であるサザエが怪しいと呼び止めた。

[資料]

长谷川町子 2001 《长谷川町子连环漫画》，译林出版社



[参考文献]

池上嘉彦 1983 「テキストとテキストの構造」国立国語研究所(編), 『談話の研究と教育 I』

池上嘉彦 2006 「〈主観的把握〉とは何か」, 『月刊言語』 35(5), 大修館書店, pp.20-27

大江三郎 1975 『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』, 南雲堂

魏志珍 2010 「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方」, 『日本語教育』
144号, pp.133-144

久野暉 1978 『談話の文法』, 大修館書店

古賀悠太郎 2018 『現代日本語の視点の研究』, ひつじ書房。

佐伯胖 1978 『イメージ化による知識と学習』, 東洋館出版社

下地早智子 1997 「移動動詞に関わる「視点」の日中対照研究」, 『中国語学』 244号,
pp.132-140

下地早智子 2011 「「視点」の違いから見るアスペクト形式選択の日中差—非限界動作動詞

- の場合一」, 『日中言語研究と日本語教育』第 4 号, pp.23-32
- 武村美和 2010 「日本語母語話者と中国人日本語学習者の談話にみられる視座—パーソナル・ナラティブと漫画描写の比較—」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第 59 号, pp.289-298
- 田代ひとみ 1995 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」, 『日本語教育』85 号, pp.25-37
- 張芄蕾 2019 「視点制約と主語の選択に関する日中対照研究—「～(テ)モラウ構文」とそれに対応する中国語を中心に—」, 『WAKUMON』49, pp.49-57
- 中浜優子・栗原由華 2006 「日本語の物語構築:視点を判断する構文的手がかりの再考」, 『言語文化論集』第 27 巻第 2 号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.97-107
- 橋本陽介 2020 『中国語における「流水文」の研究』, 東方書店
- 彭広陸 2008 「類型論から見た日本語と中国語—視点固定型の言語と視点移動型の言語」, 第 12 回中日理論言語学研究会(同志社大学大阪サテライト)配布資料
- 松木正恵 1992 「『見ること』と文法研究」, 『日本語学』VOL.11, 明治書院, pp.57-71
- 水谷信子 1985 『日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版
- 宮崎清孝・上野直樹 1985 『視点』, 東京大学出版会
- 劉爾瑟 2017 『中国語と日本語の受身文の対照研究 : 中国語教育のため』, 大東文化大学 博士学位論文
- 渡邊亜子 1996 『中・上級学習者の談話展開』, くろしお出版
- 渡邊亜子 2000 「「視点」再考—中国語の「視点」を表す言語形式—」, 『調布日本文化』第 10 号
- 矢吹ソウ典子 2017 「日本語学習者の談話における視点表現—日本語母語話者との比較から—」, Journal CAJLE Vol.18, pp.90-112
- 刘月华等 2019 《实用现代汉语语法》(第三版), 商务印书馆
- 沈家煊 2012 〈“零句”和“流水句”〉, 《中国语文》第 5 期, pp.403-415